基礎研究医養成活性化プログラム
取組の概要と推進委員会からのコメント

整理番号	1

申請担当大学 （連携大学）	筑波大学（計３大学） （自治医科大学、獨協医科大学）
プログラム名	病理専門医資格を担保した基礎研究医育成
事業推進責任者	千葉　滋（筑波大学大学院人間総合科学研究科副研究科長）

取組の概要

病理形態学の視点を欠く基礎医学研究は発展性に乏しく、その学習機会の欠失が現在の日本の基礎研究の底を浅くしている。本プログラムは入学者全員に基盤となる病理学教育を行い、日本病理学会の“病理専門医”の受験資格や、本プログラムが独自に認定する“臓器別病理専門医”資格を取得させ、生活基盤の安定も担保する。初年度は研究モラトリアム期間とし、医学英語等の学習に加え、多様な基礎医学研究テーマを閲覧できる“ショーケース”を利用し自身の研究テーマを決定する。２年目以降には、特別研究派遣制度を利用して参加３大学のどの基礎医学教室でも研究が出来る“ジュークボックス型”の柔軟性を認める。多様な基礎研究テーマのいずれを専門としても、病理形態学の知識とヒト臨床検体へのアクセス能力を備えた基礎研究医になる。次世代の日本の基礎医学研究の中心的リーダーを養成する挑戦的な教育実験である。

推進委員会からのコメント　　○：優れた点等、●：改善を要する点等

○大学院１年目にモラトリアム期間を設定しているほか、筑波大学病理アカデミックレジデントコース、自治医科大学病理アカデミックコース、社会人大学院病理コースの３コースを用意することにより、病理専門医受験資格取得を担保した基礎研究医養成を目指すプログラム構想は評価できる。

○病理は臨床と基礎の交差点であること、モラトリアムの必要、収入の担保の必要といった、病理医の特色や研究医を目指す際の課題に対応するプログラム構成となっており、評価できる。

○病理学と病理学以外の基礎研究室が協働して学生を養成する体制の整備は、学際的な研究の醸成という観点から有効であり、評価できる。

○筑波バイオバンク-ヒト組織診断センターからの臨床検体を活用する研究プログラムとなっており、評価できる。

●病理専門医取得に関しての３大学の連携、実現性、地域医療への長期的貢献が不明確である。

●研究テーマジュークボックスが総花的であり、病理学研究との関連性が不明確である。

●死因究明医の養成プロセスの更なる明確化が望まれる。